

趣味の「読書」の遍歴と三到・三余

放射線医学講座 藤本 公則

「読書」というと書物を読むこと（広辞苑）…当たり前であるが、趣味の読書という人によりその受け止め方は様々ではないかと思う。興味を引く書物の「遍歴」と、いつ、どのように読むかといったことは千差万別で、人生の一端を表しているかもしれない。

何を読んできたか…私のはっきりと覚えているのは、小学生時代に心躍らされた江戸川乱歩作、怪人二十面相と少年探偵団・明智小五郎の対決を描いた物語に始まったことである。これに続いて、国内はもとより、乱歩の名前の由来であるエドガー・アラン・ポーやコナン・ドイル、アガサ・クリスティーに代表される海外の多数の推理小説を読破した後、図書館でたまたま手にした星新一の小説に刺激を受けて、次第にSF（空想科学）の世界へ移行し、宇宙空間を題材とした小説に夢中となり、その影響もあって高校時代にはアインシュタインの理論にはまってしまい、宇宙物理学の本を読みあさった。そしてカオスやフラクタル理論まで到達すると、なぜか裏社会のフラクタル性とダーティヒーローのカオス性に魅力を感じ、その手の小説に惹かれてしまうといった遍歴であった。勤務医となる頃にはより現実的にノンフィクションの作品を読むようになるが、今では、どの分野でもとにかく仕事関係以外の活字に飢えている状態である。

さて、読書の法というものがあり、宋の朱熹「訓学斎規」から読書三到（さんとう）という四字熟語が知られている。これは心到・眼到・口到、すなわち、目でよく見て（眼到）、口で音読し（口到）、心を集中して（心到）熟読すれば内容がよく分かり、この三つが肝要であるということらしい。私の読書時の大切な三つは、1）耳には心地よい音楽（ジャズ）を、2）体には安らかにオットマン付きの上質のチェアを、そして3）口にはアイラ島のシングルモルトウイスキーを、である。

仕事が忙しくてなかなか読書の時間が取れない日々を過ごしているが、読書三余（さんよ）という四字熟語もある。読書をするのに好都合な三つの余暇のことで、一年のうちでは冬、一日のうちでは夜、時のうちでは雨降りをいうらしい。この言葉を知ったとき、私の最高の読書三余があることを思いついた。1）毎冬の厳寒の中、シカゴで開催される北米放射線学会で、2）時差ボケのため深夜に、3）大雪のため暖かい現地のホテルの一室で、そして前述の三種の神器を備えての読書の時である。

このエッセイを読んでもくださったあなたも読書の趣味がおありなら、自分の読書遍歴を思い出してみるのには人生を振り返るようで面白く、また、自分の読書三到と三余を考えてみるのも一興であると思います（笑）。